2022年12月1日号　『週刊文春』

文春美術館

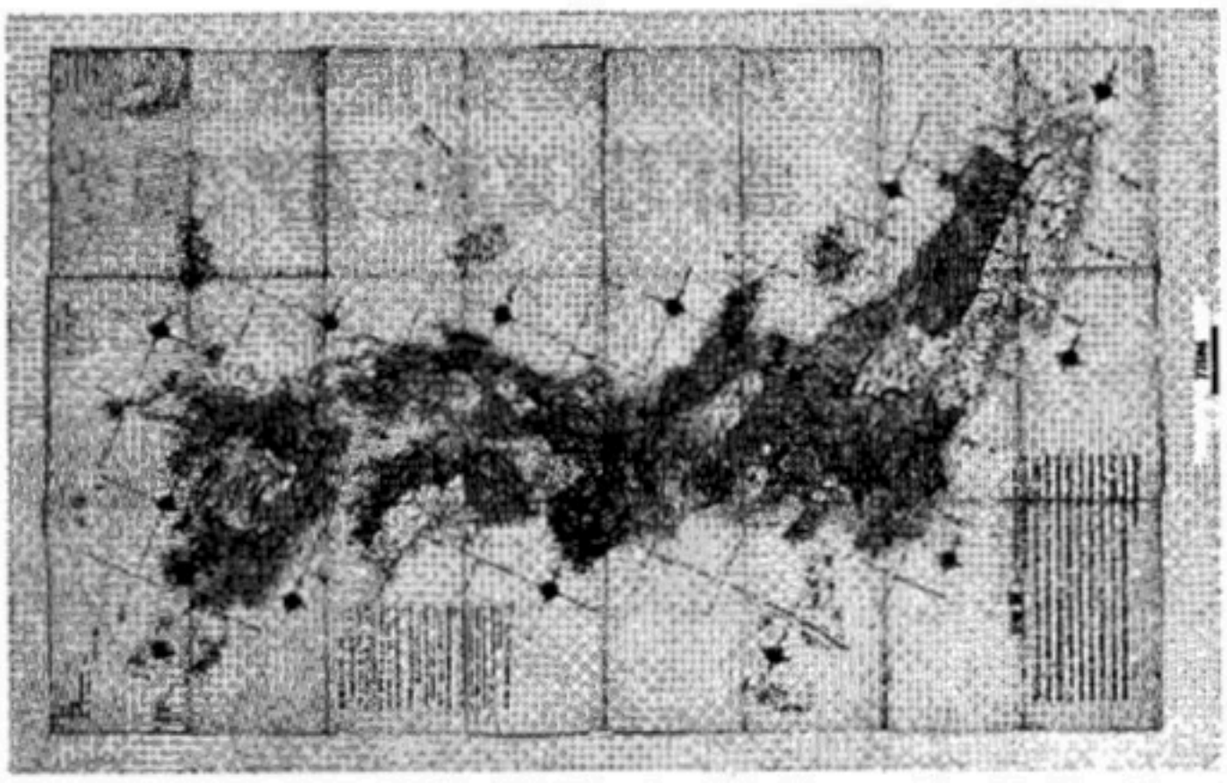
東洋美術逍遥 (41)

橋本麻里

地図が語る時代と「日本」のイメージ

「地図と印刷」

2018年、同じ印刷博物館での展覧会として、「天文学と印刷」が開催されたことをご記憶の方もいるかもしれない。会場に並ぶ宇宙＝世界の像を描き出した東西の印刷物の中に、冲方丁の小説『天地明察』で広く知られるようになった日本の天文暦学者、渋川春海による「天文分野之図」があった。時間の領域を精確に記録、俯瞰するための図に対して、今回のテーマは空間の領域を記録、俯瞰するための地図、というわけだ。



「改正日本輿地路程全図」

本展が扱うのは印刷による地図が登場した、近世以降の地図。長期にわたる平和を謳歌した江戸時代、木版印刷の技術は独自の発展を遂げ、「世界図、日本図、都市図など多様な地図がつくられ、印刷物として流布していくに従い、時代に応じた世界像が形成されていった」（本展図録）。地図とはその時代の人々がいかに世界を捉えたかを知るための、手がかりなのだ。

「日本の印刷地図のはじまりと文治の展開」「地誌の探究と拡がる世界」「世界との接近と伊能図の衝撃」。展示は時系列で、大きく3つのパートに分けられる。日本の印刷地図の始まりは慶長期（1596～1615年）。中世の有職故実の百科事典『拾芥抄』に収録された、古代律令制下での行政区分の国々を描く古拙な「行基図」だ。交通が整備され、測量技術が発展するにつれ消えていく地図だが、印刷という先端技術の上に、古い時代の世界観が載っているところが興味深い。一方、世界に目を向けるとこれに先行する15世紀の朝鮮や、16世紀のヨーロッパなどで、世界地図の中に行基図や宣教師の報告などの情報を参照した日本の姿が印刷されている。

やがて産業振興政策や実証性を重視した学問の発展を背景に登場するのが、水戸藩の地理学者長久保赤水がつくりあげた、「赤水図」と通称される「改正日本輿地路程全図」だ。展示には1779年版を出陳。明治時代に至るまで日本人にとっての「日本」のイメージをかたちづくった地図が、同時期に『大日本史』を編纂した水戸藩の地理学者（長久保は『大日本史』地理志編纂にも携わっている）の手になることは、はからずも地図の政治性を浮かび上がらせている。

やがて迎えた幕末、西洋列強との接触から海防意識を高めていく日本で、新たな地図がつくられていく。西洋の地図や地誌を参照しつつ、間宮林蔵による樺太探検の成果も反映させ、日本を中心に配置した「新訂万国全図」は、幕府天文方の高橋景保によるもの。そして初めての実測地図として伊能忠敬が完成させた「大日本沿海輿地全図」の小図を元に、慶応期（1865～1867年）に刊行されたのが、「官板実測日本地図」だ。激動の幕末期、国の安全保障に関わる情報として、奪い合われたのもまた、地図であった。我々が自明のものであるように受容してきた「日本」のイメージがいつ、どのように生まれ、印刷を通じて普及していったのか、内外の地図や版木など、100点余りの資料から明らかにする。

〔印刷博物館にて12月11日まで〕

注目の展覧会

開催間近　丸紅ギャラリー開館記念展Ⅲ ボッティチェリ特別展「美しきシモネッタ」

日本にある唯一のサンドロ・ボッティチェリのテンペラ画《美しきシモネッタ》。本展で展示される作品はこの1点のみだ。本作が日本に辿り着くまでの来歴とモデルのシモネッタの魅力を、貴重な資料を通じて明らかにする。〔12月1日～2023年1月31日　丸紅ギャラリー／日曜日、祝日、12月29日～2023年1月3日休館　一般500円〕

開催中　「パリに生きた画家たち マルケ、ユトリロ、佐伯祐三、荻須高徳が見た風景」

アルベール・マルケ、モーリス・ユトリロ、佐伯祐三、荻須高徳の4人が、20世紀初頭から1970年代のパリやその近郊を描いた作品が一堂に。同じ対象物を描いた際の、画家の表現や個性の違いも楽しめる。〔～2023年2月26日　ヤマザキマザック美術館／月曜日（1月9日をのぞく）、12月29日～2023年1月4日、10日休館　一般1300円〕

終了間近　特別展「没後80年記念 竹内栖鳳」

近代京都画壇を牽引した日本画家・竹内栖鳳（1864-1942）は、動物画の名手として高く評価された。「動物を描けばその体臭まで描ける」と本人は語ったそうだ。思わず触れたくなるような毛並みの《班猫》、個人蔵の初公開品も含む、初期から晩年までの作品が集う。《班猫》は撮影も可。〔～12月4日　山種美術館／月曜日休館　一般1300円〕

はしもとまり／1972年、神奈川県生まれ。ライター、編集者。永青文庫副館長。金沢工業大学客員教授。最新刊「かざる日本」が好評発売中。